

(論 文)

日本統治末期の京城舞鶴公立高等女学校の校長と 内鮮一体の実態 (3)

新 井 淑 子

キーワード

内鮮一体の教育 京城舞鶴公立高等女学校 京城舞鶴公立高等女学校生の人間関係
舞鶴女子高等学校開校60周年記念式典 55年振りの「学友」再会

はじめに

筆者は、これまでに同一表題の論文を2回発表している¹。初回の論稿では、1940年度の京城舞鶴公立高等女学校（以下舞鶴高女と略記）の開校前後と長谷山利市初代校長の教育観、内鮮一体の具現化、可視化、学徒戦時動員体制等の実態を明らかにした。

二回目の論稿では、1943年秋の海軍の「内地人」生徒募集条件を校長は「日本人」に変更させ32名が採用された。その壮行会（父兄聯盟主催）等への批判、校長の転出の経緯をみた。さらに同校卒業生の進路は、1944年卒の第1期生は官公庁が55.8%（第2期生24.5%）と多く、第2期生は上級学校進学が38.1%（第1期生19.7%）となる。1945年8月15日の高女、敗戦後の日本の生活や高女編入と光復後自らの民族に目覚める感動をみてきた。

三回目となる本稿では、舞鶴高女生がみた同校の教育や生活とその意識や実態、戦後の高女関係者の交流、舞鶴女子高等学校開校60周年記念式典、55年振りの学友との再会、高女教育がその後の人生にどのような影響を及ぼしたか等を、同校関係者へのアンケート調査、学校史や聞き書きを交えて考察してみたい。

1. 舞鶴高女生の生活と意識や実態

高等女学校の卒業生に舞鶴高女の教育や学校生活の意識や実態について解明するために、1989年の高等女学校研究会のアンケート調査²、学校誌『舞鶴60年史』の卒業生の手記「舞鶴第41号」、同校教員上田照子（現姓池田）の手記、筆者への手紙や卒業生と在校生（1945年8月15日現在）の聞き書き等から、彼女らの学校生活、意識や実態等を見ていきたい。

1

(1) 各教科の学習と教師

担任の男性教師達は、「真面目」、「厳格」で「打ち解けると大変きさくで親切、人情味」があり、「皆の憧れの先生（は）…応召して戦死」したが、その先生の「不言実行」に「影響をうけた」。「女の先生は、はきはきしていてチャーミング、何でも相談したくなる方」で、「就職」や「師範」学校

の「受験等の進路の相談」をした。

長谷山校長は修身と国語、家庭演習に関係した。「教育熱心で修身」は、「女性として国や家に奉仕する精神的なものが主」で「女として最後の一線をこえてはならない」等。また修身が「就職にも結婚後も役に立った」。「校長先生は、あまり好きではなかったが、短歌について影響を受けた」。他に国語は、「万葉集、愛国百人一首を覚えた」ことや「文法の四段活用など」も学んだが、「漢字を正しく覚えるため突発的に試験がよくあった」上に「作文も書かされた」、と。家庭演習では「校長宅に4人組で泊まり家事全般について勉強した」。同様に他の卒業生も「学校生活の印象」の項に「…校長先生宅に泊り…、日曜日…学友2人が（校長宿舎を）…訪問して一緒に昼食…、日本の生活様式を体験させる学習を続けて…。なかなかできることはありません」と記している。

歴史は、「歴代の天皇名の暗記や地図を作成」した。授業中「先生」が語る「史実の話が面白く、興味を持ってよく聞いた」。故事成語の「人間万事塞翁が馬」等の「講義を面白く」聞き、「好感の持てる先生でしたので特に地理や歴史は好きだった」。

英語は、「1、2年は全員、3年の1学期までは上級学校を希望する者だけ授業を受け」させたが「その後、完全に敵国語として授業はなかった。途中から受けられなくなったことが、とても残念だった」、と多くの卒業生が述べている。また「英会話を人前でさせられ」たり「書きとりもよくした」。「単語も覚え」「一度、講堂に集まり学芸会が行われた」。

理科は、実験や蛙の解剖が印象強く、特に第6期生（1945年度入学）も作業が多かったが「山から蛙をとってきて解剖」³した。

「一坪農園（で）…、なす、トマト」を栽培し草取りもよくしたが、…肥料をやり過ぎて実（が）ならなかった⁴。理科の「中山先生（と）…漢山に登り、リンドウ深山キンポウゲ等…歩きながら教えていただいた」⁵。

数学は、「分かり易くよく説明して」くれたが、試験の答案を「壁」に「貼り出された」。

音楽は、「楽典は難しかった」が、『花』の3部合唱」や「軍歌の合唱」をした。

図画は、「先生が日本画で展覧会」に出品したので、展覧会に行きその作品を鑑賞した。朝鮮の「風景がきれいでしたので（図画は特に）印象に残っている」。

体操は、複数の卒業生が「体育検定」や「体力検定」、「スケート大会」をあげている。冬は「せり田」で「滑っていた」が、「昌慶苑の池でスケート大会をした」。「教練、分裂行進」「マラソン」「バレーボールは大変活発」で、「剣道」も習ったのである。

担任の玉木先生（体育）は、第2期生が海軍の試験を受験しようとした時「そんなところに行くな」と言われ、教師の言動を心配した生徒がいた。「玉木先生は紳士的だった」。また「山にも連れて行ってくれた」。「専門学校の合格発表」を見に行き人が多く駄目だろうと思いき学校に帰ると、担任の玉木先生と一緒に見に行ってくれて、「合格をみつけてくれた」。

長刀の「三好先生」からは、長刀を「砂利があるところで素足で習った」⁶。

2 家事は、教科書はないが上田は日本と同じ内容を教えた。「先生はこわかった。厳しかった」⁷という。回答者の半数は「料理実習」をあげ、朝鮮ならではの「キムチを漬けた」のである。戦時下を反映し「京城大学病院で看護実習をした」のである。

第2期生の「家事は山根先生。着物、赤ちゃんのチャンチャンコも縫わせた。提出物の返却には『よくできましたね』と、こよりをつけてくれた（たのが）…とてもうれしかった」⁸。裁縫は、「浴衣の早縫い競争」や「もんぺの上下を絹反物で礼装用として縫」った。第3期生は「日本の羽織まで縫うた」⁹。しかし、1945年度入学の第6期生は、「家事、裁縫の時間は、殆ど勤労奉仕に取られ防空壕掘りに費やされた」、と記している。

(2) 学校行事

「内地への修学旅行」は戦争で「いけなかった」。1944年3月の卒業生は「4年生の春」か「夏休みに合宿」で「扶餘神宮の勤労働員をかねての旅行」をした。その日程は「3～4日位」（「2泊もある」）であったが、戦時中で「重苦しい思い出」しかない。

遠足は、「北漢山、洗釧亭など山や川へよく行った」が、「強歩とか、かなり高い山に登ってきつかった」。1943年3月卒の第1期生は、「仁川まで」往路は「徒歩で山に行き」、復路は「電車」で帰宅した。この登山に虚弱な子の親は「仁川まで」同道¹⁰していた。なお、仁川の遠足はこの1回限りであった¹¹。

広々とした運動場で「戦時色の濃い、分列行進やなぎなた体操、愛国行進曲のダンス」「チークダンス」などで、「長刀」が印象深い。

音楽会やバザーは、学芸会と関連して「独唱」も「楽しい思い出」である。

講演会には、「紀元2600年祭に相撲取りの鏡里」が来たが、その後は「古谷綱武先生」や「陸軍、海軍の将校」が高女に来て「雨にも負けず」「銃後を守る女性のあり方のようなこと」を「講堂の板の間に正座して聞いた」。その「辛さ」にも耐えたのである。

部活動は「茶道部」や「生け花」「文芸部」「バレーボール部」があり、各部で活躍していた。なかには生徒会活動で「4年間校旗の旗手」を努めた生徒もいたのである¹²。

(3) 読書と世の中の動き

学校の「図書館」で「文学全集や単行本、文庫本、歴史物、動物物語など」、「夏目漱石の『こころ』、森鴎外の『舞姫』や「三銃士、べにはこべ、罪と罰、復活その他…家にあった世界文学全集」を読み、「吉屋信子」の作品も「数冊」読む。また、「父親の書架から…『宮本武蔵』」を読む。校庭の「背が高いポプラ（の）…下で、私は思索にふけり<ヘルマン・ヘッセ><ポー><トルストイ>などの名作を読んだりした」¹³。

『世界文学全集』や婦人雑誌も読んでいた第2期生は、近年も『源氏物語』『おじさんの台所』（田辺聖子）、三浦綾子等を韓国在住の卒業生同士で回覧して読んで楽しんでいる¹⁴。

第6期生（後述）には、現在も一人で日本語の小説を読み続けている人もいる¹⁵。

世の中の動向についての認識は以下の通りであった。「毎日のニュースは、日本軍の勝利を伝えていたがいつしかどうもおかしいと思え…一日も早く戦争の終わる事を願っていた」が、「戦争をしている以上、なんとかして御国のために役立ちたい」ので「海軍志願」をした。他の卒業生は「とにかく戦争の重苦しさからのがれた」かった、と。また、「戦況」の「ニュース」に「注意」した。1年生（1945年度入学）は「世界には、戦争する場所がある位の知識しかなく」、1945年「3月10日の東京大空襲」のニュースには「びっくりした」のである。

(4) 友人や学校生活の印象

「仲良し7人グループでスケート」を楽しんでいた。「進路」「悩みごと」等「深刻」でない「相談」を友達にしていた。「親しい友人によく愛だの人生（を）話し合」あった。中には「仲良」の友は「真面目で頭の良い人が（で）試験の前などよく教えてくれた…（その友は）お茶目、冗談」をいって「笑わせた」。「現地人の…学友」の「お父さんが亡くなり、沈んでいたので双方の家に行ったり来たりしてよく付き合った。お正月には朝鮮のお餅をたくさん」届けてくれた。「1期生なので…下級生も妹の学友がいて共に作業などよくやった。飯盒炊飯もいっしょに」した。上級生の中には入学生との対面式や朝礼等で「可愛い子」を見染めて、その子の下駄箱に手紙を忍ばせる。下級生も

その「手紙をもらって楽しかった」。吉屋信子の少女小説のように舞鶴高女でも「Sのこと」があり、それが発覚して教師には「叱られた」のである¹⁶。

勤労奉仕が多いことを綴ると同時に第1期生（1944年3月卒）の自覚と「内鮮一体」の教育実践の一端をあげる。軍国主義で強制的な日々を反映して、高女時代の楽しみを奪われたという卒業生もいた。「勤労奉仕と銘打った作業が大変多く」「学園栽培で野菜を作」り、その「草取り」が印象に残っている反面、舞鶴の「第1期生」は、「先生方も熱心に教えてくださったし、私達も最上級生（は）…何かにつけてもよく頑張った」。しかし、卒業前「海軍軍属として大勢志願して行く人があり、その頃友人と毎日のように話し合った」。「私自身…、暗かったと思う。…昔は…命令でやらされ…つらい思い…。やはり、戦争と切りはなすことが出来ず、女学校時代…楽しかった（ことは）…あまり」なかった、という。

2. 舞鶴高女生の人間関係

（1）朝鮮人のみた日本人生徒

舞鶴高女の内鮮一体の教育は、植民地の朝鮮人の高女生から母国語を奪い、日本語による日本の皇国臣民の誓詞、教育勅語等日本人の精神と生活化の実践を強いるものであった。朝鮮の風俗習慣を無視した正座、長刀、礼法等もあった。朝鮮人の高女生は母国語、植民地の教育体制、日本人生徒たちをどのように見ていたのか、『舞鶴60年史』（2000年刊行）と筆者の聞き書き等をもとに記したい。

まず、日本語の教育で「韓国語（朝鮮語）」が使用不可となり、それが「最も悲しかった」。その上「うっかり韓国語（朝鮮語）を使」用したとき「日本人生徒が、告げ口をして使った人は膝を曲げて罰を受けることもあった。しかし、決して恥ずかしいとは思わなかった」。日本語による日本の教育が、母国語を奪ったことで民族の自覚や自尊心が身につけていったのであろう。

他の生徒は「多く先生たちは日本人で…学校体制と雰囲気は日本式で教育自体が日本的なものを習っているようで」と、植民地の教育に馴染めない実態を吐露している。しかし「4年生になると…学生（生徒）たちはひそかに韓国語（朝鮮語）の本を読んだり書いたりし、それで退学さ（せら）れる学生もいた」、と朝鮮人としてのアイデンティティに目覚めていったからなのであろう。

高女の生活が「差別的」で日本人との「葛藤と対立」の日々であり、その苦悩と内的「競争」に打ち勝つ高女生がいた。彼女は「…いくら勉強ができて学級幹部（級長）を韓国人（朝鮮人）にさせることはなかった。差別的な学校生活に表面的な抵抗はできなかったがいつも注視していた。しかし、公的に競争できる体育行事、教科活動などは違った。葛藤と対立、差別的な学校生活から胸を張って生き生きすることができたのは勉強と体育行事だけだった。一回も日本人学生に負けたことはなかった。ひそかに自尊心を守って相手を打ち倒す痛快感を味わった」、というのである。

この高女生のいう差別や「葛藤と対立」は、「いつもあった」が、民族の食文化を代表する身近な「キムチの匂い」が特に冬期には「弁当を温める」ために「喧嘩」になった。日本人から「軽蔑的な侮蔑なやゆ、からかいが飛んできた」¹⁷、という。第6期生は、高女での「民族差別はなかったが、喧嘩はあった。日本人は朝鮮人を『あんたたち、キムチ臭い』、といわれると癪にさわるから『あんたたち、沢庵臭い』、といって喧嘩した」。その喧嘩を「先生は両方の生徒を叱った」¹⁸のである。

民族の「葛藤と対立」等を感じなかった日本人のように見ていた朝鮮の生徒もいた。彼女は、舞鶴高女の目指した内鮮一体の学友制度を実践躬行した第2期生である。彼女は入学時学校で決めた学友と「仲良くお互いの家によく行き来し、学友の家で婦人雑誌も読み、食事もしたりして」、「1クラス2～3組がもらう学友賞」を貰った程である。日本人が引揚げ後その学友を日本人の同級生

にも問い合わせたが学友は見つからない。そこで学友の母親の読んでいた婦人雑誌の「尋ね人」欄に韓国から依頼をしたが、いまだに行方不明であり、現在も学友をさがしている¹⁹。この卒業生は高女には民族差別はなかった、と次のように記している。

「朝鮮の生徒も日本の生徒と変わりなかった。日本の生徒と仲良くして、休み時間に『愛染かつら』などの流行歌を習ったり、『りんごの木の下…また会いましょう』、と歌った。日本人と朝鮮人の差別はなかった。級長にも朝鮮人はいた。日本人と朝鮮人の区別はしなかった。差別は全然なかった。日本人より朝鮮人の方が腕白だった。女学生気分は全部味わった」、と²⁰。

(2) 1945年度の入学生の第6期生たち

戦禍のなかでも高女の入学式をあげた生徒達は「小学校5年生から軍事作業（軍服のボタン付け）をした。高女の学校生活は、「午前中は学習して、午後からは学内に掘った防空壕の土を袋に入れ学校の山の方に運んでいた。学校の山へB29が飛んでいった。あまり勉強の方の思い出がない」。時には高女生らしい文化の「S」の楽しみもあったが、同年7月7日に学友が発表され、同年8月15日は敗戦である。その間に互いに相手を思いやり協力して生活し友情を育んだ生徒たちがいた。「雲母はぎ」の作業終了後「味噌あん大福が1日1個配られた印象のみ」残る。それを「学友も周囲」の友も相互に「あげっこ」して、順に家に持ち帰り「家族が喜んでくれるのが嬉しかった」²¹。その餅は「他の高女にない優遇措置で、舞鶴高女が朝鮮総督府の直轄学校だから」と思っていた²²。

しかし、それは既述の通り「一部の生徒の不穏な動きを察知した学校側の懐柔策」²³であった。

また地方では『キムチ臭い』喧嘩（前述）もあった。

なお、学校が決めた学友の発表が従来より3ヵ月遅らせたために、学友が「嫌い」で「泣いたり、代えてくれ」と言う生徒が出た。そこで教師は、「生徒に目をつむらせ」学友が「嫌いな人は手を挙げて」と言った。しかし教師は生徒が挙手しても「学友を代えなかった」のである。

なお、4月の入学式に入学生代表の挨拶をした上根幸子（現姓小野）は、学友が試験で良い点をとると「平田さん、平田さん、漢文が一番よ」といって、それを「自分の事のように喜んでくれた」²⁴。この学友こそ55年振りに再会した後述の2人である。

3. 同窓会・日韓相互の交流と韓国の舞鶴高女卒業生の思い

(1) 同窓会・日韓相互の交流

1944年8月に「京城舞鶴高等女学校同窓会」が開催されている。上田（現池田）が作成した「昭和19年8月現在」の「学友會員名簿」（含住所）には、舞鶴高女の現職の「職員」「21名」と第1期卒業生「138名」の全員が日本名（含創氏改名）でアイウエオ順（「赤松〇〇」～「米田〇〇子」）に記載している。職員は犬丸勝良校長を筆頭に男性教員11名（含応召中の柴田―「比島」、秋月）と10名の女性教師（含3名が朝鮮）である。当日は写真撮影をしている。なお、この同窓会は高女が主催した初回のようにあり、初代校長長谷山利市は参加していない²⁵。

その後の同窓会は日韓別なのか合同開催なのか定かではないが、個人か団体（「まいづる会」、舞鶴女子高等学校同窓会）か判明しないが、日韓が相互に交流している。例えば第4期生の「和田竹子」は沈竹子であるが、彼女の絵画の展覧会が何度か東京銀座の松坂屋で開催された。そこには第4期生や舞鶴高女関係者は出向いている。彼女たちは、会うと当時の名前で話して旧交を暖めている。また韓国の友人達と箱根（2001年）や秋田県等に旅行をしていた。同期生でなくても韓国の先輩の自宅に日本人も宿泊している。金沢在住の鍋木先生の家には韓国の卒業生が何度も宿泊していたのである²⁶。

5

韓国の卒業生も日本人が「何度か校長先生、また何人かの先生方が来韓し、舞鶴の広場で再会する機会を持ち、また韓国や日本で同窓生同士の集まりも持った」²⁷という。

教師と生徒は卒業後も強い絆で結ばれている。開校当初から卒業まで第1期生に拘わった上田照子（現姓池田、以下池田を使用）には、卒業生が手紙での問い合わせ、世界産婦人学会副会長等世界的に活躍している教え子のその報告等もある。池田は彼女たちに2011年位まで筆者のために電話で話している。また池田は2012年に95歳を迎える現在も韓国で病気治療中の教え子を気遣い、舞鶴女子高校の関係資料が届くと、それらを日本の卒業生に2011年も回覧している教師である。

第2期生の韓国在住者は、2006年頃「福岡、別府の旅行」を計画し「アメリカ在住から下関に戻った「山根先生が心配」で連絡すると「息子さん」の「手紙」で病気が進行中で会えない状態とわかり、残念がっていたのである²⁸。

1990年4月には舞鶴女子高等学校開校50周年記念があり、池田も舞鶴高女の関係者の日本人と訪韓している。

（2）韓国の舞鶴高女卒業生の思い

既述の高女時代の民族の「差別」、「葛藤と対立」の本質を植民地政策に見出し、植民地故の自国の苦悩をみつめたうえで、日本の教師や日本人の友に対して、その時代は日本の為政者の政策に互いに翻弄された「犠牲者」として位地付け、「切ることのできない」人間の「情」をパク・ギチンは、1996年に次のように記述している。

「…我が民族が虐待され、その醜い歳月を耐えてきたか…、先人に対して感謝を込める…。日帝治下の日本人教育者の下で日本人学生と一緒に勉強したという運命的な事実、恥よりは…悲哀を感じた。それは18歳…自分に対する、肯定的な評価であった…。一つ確実なことは、日本軍国主義という野蛮な政治家のせいで、私達が36年間国を奪われた悲運を経験したが、個人的な面、人間的な面では彼らを敵対視できない結論である。

敗亡により一夜で罪人になった先生と学生の間、挨拶さえ…できないまま慌ただしく帰国し…た日本人の先生達、また、…少女期を共にした日本人の友達。彼らは、私達にとって確実敵ではなかった。私達はその後、何度か校長先生、また何人かの先生方が来韓し、舞鶴の広場で再会する機会を持ち、また韓国や日本で同窓生同士の集まりも持った…。国家や政治家の間違ひは、即ち故郷を離れた人間的な情を切ることができない事実が分かった。私達みんなが、時代的な国運の悲劇を経た犠牲者であるためだ」²⁹。

4. 舞鶴女子高校開校60周年記念式典

（1）開校60周年記念式典への同校校長の願いと日本人の訪韓

前述の植民地体制のなか舞鶴高女で共に学んだ異民族の同窓生たちを、パク・ギチンのいう互いにその「犠牲者」とであると捉え、国境を越えた寛大な「人間的な情」を断ちきれない心境が、開校60周年、同60周年の今日の交流と未来に繋がっていくのであろう。この考え方を踏襲してか「生徒達の韓日の交流を願って」舞鶴女子高校校長劉永粉は、2000年4月20日「舞鶴女子高校開校60周年記念式」典への日本人の招待を決定し、同年1月に招待状を発送した。なお、劉永粉校長は舞鶴高女の第2期卒業生であり、それを「成功させる為（19）99年9月に就任」³⁰したのである。

同校創立時を知る唯一の教師池田照子に同校から招待状が届いた。池田は「80歳を越え」「毎日」「病院通い」で「杖がなくては歩けない体」で「何が何でもこの厚意に報いたいと一大決心」をした。池田は一人で高知空港から福岡空港に飛び、旅行社作成の「訪韓プラン」で「福岡」空港で関係者

と合流して「金浦空港」に式典前日に到着した。それは3度目の訪韓である。日本人関係者は「仙台、富山、成田、名古屋、関西、広島、福岡」空港から「48名」が韓国に到着し、同校「訪問団」を結成したのである。

(2) 舞鶴女子高校開校60周年記念式典

2000年4月20日の式典当日、同校「訪問団」は「2千名を越え」た人々の「拍手」で迎えられた。同式典は「10時」に開始。先ず「石碑の除幕式」では、「誠心」（正しくは「至誠」と漢字で彫られた見事な「石」が「万丈の拍手を浴び」た。次に「国旗掲揚」、「学校長の式辞」、「ソウル市教育監の祝辞」、「日本人恩師、開校当時本校在職池田先生」の祝辞（通訳者付）、「名誉卒業証書及びメダル授与」、「功労杯授与」があり1時間で式典は終了した。

池田の祝辞は光復後にも拘わらず校名に「舞鶴」と冠したことや創立年の継承への謝辞、現在の舞鶴女子高の発展と教職員への敬意等を以下のように表したのである。

日本人参加者たちは韓国を「現在でも我が古里の如き思いを寄せている者ばかりなのです。でも歴史を詳しく」みると「日本の植民地政策により韓国の国民に多大の屈辱や苦難を強いて来たことを知るにつけ、身の縮む思いが致します。

今回創立60周年記念式にご招待頂き、校名（舞鶴女子高等学校）も、創立の年月も昔のまゝ、それを土台にして誠心誠意努力を重ねられ今や韓国、ソウルに於ける名門校として発展の一路をたどられ、卒業生数二万五千七百名を数え多くの人材や功労者を育て、来られたひたむきな誠意に対し心からなる敬意と感激を贈らずにはいられない気持であります。韓国では今や南北統合の大事業が最大の課題となっておりますが、がっちり結び合い一つの韓国となり、最も近いアジアの隣国として真の親善と協力、文化の交流がかわされアジアの先進国としての使命を果たして平和に貢献出来る日を祈って止みません」と。

池田照子は当日「舞鶴女高発展功労」（同校校長と同窓会長名）のメダルを授与された³¹。

(3) 「名誉卒業証書」等の授与

舞鶴女子高等学校劉永粉校長は、日本の敗戦・光復の「朝鮮解放」やその後6・25戦争で学習半ばで卒業できなかった「1942～45年」までの在校生を調査して、93名の「消息が確認」できた。そのうち式典に参加した日本人「16名」と韓国人「21名」に、劉永粉校長は「名誉卒業証書」とメダルを2000人を越える参列者の前で一人ひとりに授与されたのである³²。

(4) 歓迎パーティー

式典直後同校講堂で「歓迎パーティー」があり、「生徒会」や「卒業生の…有名タレント」の「民族芸能」等があった。池田は「思わず…発起人となり生徒の皆さんにカンパを募り心からの謝意を表した。この時間、池田は新聞記者に囲まれ質問攻めであったが、韓国語で応えようがなく日本人記者と話す。翌日韓国で「名誉卒業証書」等授与された人たちが写真入りで報道されたのである。

7

(5) 学友との55年振りの再会

「新羅ホテル」の同窓会主催の「歓迎パーティー」の会場で、日本の参加者は、ソウルの発展と学友達への感謝と生徒達の印象を述べていたのであろう。「あの辺鄙だった学校が繁華な町のなかになって、まさにいま浦島の感でいっぱい」³³。

「あの感動一杯…。ソウルの発展もすばらしく、舞鶴の明るい躍動も心に…また熱い血潮を与え…、

（舞鶴女子高校の）キリリと後髪を束ねた女学生に日本も一杯学ばねばと感じました。…学友達の…歓迎には、頭が下がる思いで一杯…。…本当に参加して良かったと、人生が一廻りも二廻りも大きくなった」³⁴、と感動している。

そのような状況のなかで55年振りに学友をさがしだしたのは小野幸子（旧姓上根）である。小野は「歓迎パーティー」に集う韓国在住者に「第6回生の方いませんか」と声をかけ、手には「平田憲子様」と書いた「紙切れ」をもって「学友」を探し廻っていた。日本語の通訳も経験され小説も読み、日記まで書ける文銀星は「何をお探しですか」と声をかけた。文銀星は「平田憲子様」と書いた紙切れを見て、なんとそれが本人の55年前の改姓名であった。2人は55年振りの再会である。

文銀星は「自宅に小野さんをお連れして、再開の喜びを分かちあった」。文銀星は、「人間の絆は国境を越えて深かった、55年振りに始めてあったにも拘わらず話題は尽きることがない」という。なお、この出会いを文銀星は、「神のお導きと受けとめている」。それは小野の母親が、引上げの荷物に高女の受験票から舞鶴高女の2人を明記した「学友証」³⁵まで忍ばせていたのである。文銀星は、この賢婦人の母の思いに感動し、その心を大切にしているのである。また小野の人間性や「人なつっこいところ、韓国が大好き」等もあり、交流は時には家族も交え現在も続いている³⁶。

小野は文銀星の入院中の連れ合いとその看護を気遣っている。55年振りに再会した「学友」は、国境を越え親友に深化し今やかけがいのない存在、となっているように見える。

小野は後進に華道の指導をする傍ら、日々韓国の言語や文化を某大学でも学び、2011年に2回訪韓したが、2012年も2回以上訪韓の予定である³⁷。

おわりに

「内鮮一体」型の舞鶴高女の5年5ヵ月の教育について、日本の研究者は「舞鶴高女は総督府の政策に沿ったモデル校だった。総督府は『内鮮一体』を掲げたが、政策の中身は徹底的な日本人化だった」³⁸、と述べている。

そのために舞鶴高女の教育を、民族の「葛藤と対立」と民族「差別」等を日々「注視」し、悶々とした朝鮮人生徒の存在を、日本の教師や日本人生徒は察知できたのか否か。教師は仮に察知できても立場上植民地体制を如何ともし難い存在である。しかし内鮮一体のため学内の級長は朝鮮人を任命できる。その任命がなく悶々としていた高女生と対象的な朝鮮人の第2期生は「朝鮮人の級長もいた」（筆者も第1期、第4期生に確認）「全然差別はなかった」という。

高女で母国語の読み書きで退学させられた生徒、決戦期に制服の下に白い民族衣装を着た朝鮮の高女生たちを、学校は「一部の生徒の不穏な動き」として「察知」した。他高女にない「餅」か「蒸しパン」の配給、という学校側は「懐柔策」をとったが、それが精一杯であったのであろう。但し、舞鶴高女には「海軍には行くな」と指導した教師もいた。それが発覚すると体制反逆罪で処罰される危険を察知した日本人の高女生もいた。「現地人に『日本人が朝鮮を取ったのだ』」と言われ、それを「小学生の頃気にし」たが、高女では「日本人の立場」を「何となく後ろめたい気持ちをもっていたような気が」する³⁹程度の日本人高女生もいるにはいたのである。その日本人生徒を敵と見なし、その戦いに挑む孤独と思える「競争」心を支え続けた強靱な「自尊心」等の精神力は、本人が意識したか否かは別として朝鮮民族の独立への渴望が根底にあったのであろう。日本語による日本の内鮮一体の同化政策推進の植民地教育の意図に反し、民族のアイデンティティを育成した事例となろう。

高女は植民地教育と決戦期の軍事関係作業等にもおわれ、その推進が期待され、苦慮に苦慮を重ねたと思はれる「懐柔策」が効を奏す暇もなく、敗戦を迎え日本人教師は、「八・一五で解職」⁴⁰と

なり、生徒に挨拶もなく国の指示で引揚げたと思われる。

それでも人間の情は共に時代の「犠牲者」とみる叡知が踏襲され、国境を越えた交流がなされている。2000年には共に舞鶴女子高校の開校60周年とその発展を祝った快挙は、同校・同窓会の真の国際交流を願っての配慮に、日本人「訪問団」が応えたのである。

そのなかで内鮮一体の学友との55年振りの再会である。まさに人間の情が対等な民族としての親善・交流となり進行中である。草の根の日韓交流の一つの典型となるであろう。

決戦期の舞鶴高女で学んだことがその後の人生にどう影響したのか、彼女たちの言葉を聞こう。まず、「全てにわたって厳しかった」舞鶴高女の教育が、「引揚げて逆境に生きることが出来たゆえん」であり、「逆境の中でも生きる強さを身につけ」、「生活の立て直しに翻弄された時期を乗り越え」るとき、高女の「厳しさが役にたった」と。長谷山は「教育熱心」で、「女として最後の一线をこえてはならない」等、修身が「就職にも結婚後も役に立った」⁴¹と日本人はいう。

また光復後動乱等を乗り越えて専門知識を学び、それを活かした事業を拡大発展させている卒業生は、「私達舞鶴高女を卒業した方たちは、忍苦鍛錬の精神が強く、又正直で人生正々堂々と生きて居ると信じています」⁴²という。

最後に長谷山利市と同時期の中学校校長とその家族が、戦後植民地教育推進者として苦悩したが、それを見たい。

「内鮮一体」の共学の「初代中学校長」の娘である森崎和江は、父親が「少数民族問題」の「松下村塾」を創る展望をもって「日々、常に張りつめ」「若い青年…の個性につきそった父」は「人種差別はみじんもなかった」、と。その「事実が、私たちを敗戦以来くるしめた」。森崎は「無感覚におしよせてくる同化の海に直面したので、父の問題意識と愛のふかさこそが、そのまま彼らの独創性の弱体化へ通じた」⁴³と苦悩するのである。

長谷山利市は広島に引揚げて2年程で死去⁴⁴したのは、森崎やその家族同様に植民地政策の推進者の一翼を担った結果と前述の「一夜にして罪人になった先生」⁴⁵としての苦悩に押しつぶされたのであろうか。

註

1. 国際コミュニケーション学会『国際経営・文化研究』2011.3 VOL.15 No.2と同論文(2) 同誌 2011. VOL.16 No.1
2. 高等女学校研究会プロジェクトチーム「戦前の女子中等学校の研究—高等女学校卒業生に対するアンケート調査資料 No.4 (外地高等女学校分)」である。アンケート調査は、1945年の卒業生20名にアンケート用紙を発送し12名が回答した。それを同上174～181頁に記載した。以下本文中に註記のないのは、同資料からの引用である。
3. 小野幸子・文銀星より2011年1月12日聞き書き
4. 高等女学校研究会プロジェクトチーム「戦前の女子中等学校の研究—高等女学校に関する調査資料 No.6 (韓国の女子高等普通学校・高等女学校の分)」2002年 93～95頁
5. 佐藤かね子より池田照子へ2001年2月26日付手紙
6. 田中美智子(が友人に確認済み)より2010年2月12日聞き書き(電話)、2011年5月20日聞き書き
7. 家事は日本と同じと池田談、「厳しさ」等は、元京城舞鶴高等女学校教諭池田照子「今も続く教え子との交流」『WINDOW (財)高知県交流協会 2001 世界の笑顔あつまれ』Autumn No.30 2頁
8. 金玉圭・呉春換より2011年1月14日聞き書き
9. パク・ギチン 許善子訳「卒業生追想『ああ、昔よ!』」『舞鶴第41号』舞鶴女子高等学校 1996年、高等女学校研究会プロジェクトチーム「戦前の女子中等教育の研究—高等女学校に関する調査資料 No.7」2000年3月 33頁
10. 小坂康子より2009年11月18日聞き書き

日本統治末期の京城舞鶴公立高等女学校の校長と内鮮一体の実態（3）

11. 舞鶴高女の開校時～1945年6月まで同校教諭池田照子（旧姓上田）より2009年11月22日聞き書き
12. 9に同じ
13. 9に同じ
14. 金玉圭・呉春煥より2011年1月14日聞き書き
15. 文銀星より2011年1月12日聞き書き
16. 直井美智子より2009年12月26日聞き書き
17. 舞鶴女子高等学校・舞鶴女高同窓会『舞鶴六十年史』2000年 高等女学校研究会プロジェクトチーム「高等女学校に関する調査資料 No.9」2003年 100頁
18. 15に同じ
19. 呉春煥より2011年1月14日聞き書き
20. 呉春煥より2011年2月11日筆者宛手紙
21. 16に同じ
22. 15に同じ
23. 『国際経営・文化研究』2011.3 Vol.15 No.2 11頁
24. 15に同じ
25. 池田照子より2011年12月26日付筆者借用資料 写真は2012年1月6日電話で確認したが、筆者は未見である。
26. 「和田竹子」が「沈竹子」と韓国宿泊は市原陽子より2012年1月5日、同10日電話による聞き書きと確認、箱根は、上記7に掲載された写真（2001年の写真）、秋田は小野幸子等から聞き書き、鎗木先生は、田中美智子（2011年5月20日）と高橋文子（2011年5月21日）より聞き書き
27. 9に同じ
28. 14に同じ
29. 9に同じ
30. 池田照子より2009年11月22日聞き書き
31. 池田照子「『舞鶴女子高校開校60周年記念式』に参加して」と題した手記（400字詰め原稿用紙15枚） 15頁
32. 「名誉卒業証書」は「第087号 名前 小野幸子 上記の者は1945年4月から1945年8月まで本校に在学しました。よって開校60周年を迎えるにあたり舞鶴女子高等学校の名誉卒業証書を贈ります。2000年4月20日舞鶴女子高等学校長 劉永粉」小野幸子提供。なお、当日の様子は以下に名誉卒業証書授与の写真入りで報道されている。「友好の海峡 半世紀ぶり『卒業』ソウルの女子高」東京新聞 2000年4月21日
33. 田中美智子より2001年2月5日付池田照子宛手紙
34. 佐藤かね子より2001年2月11日付池田照子宛手紙
35. 小野幸子（旧姓上根）2009年12月28日聞き書きと資料提供 小野の母堂上根エイは、引揚げ時に下記「学友証」を日本に持参し保管していた資料が「学友証」である。それは、内鮮一体の舞鶴高女の教育を実現する基礎単位として、日朝の学生2名が1組となり、それを「学友」と称した。それは学校生活の基礎単位となって学級、学校全体に組織化されると共に行動したのである。その学友制度の意義と学友の発表、保護者名と住所、職業が記載され、家庭の理解と協力を依頼した「学友証」を舞鶴高女校長犬丸勝良名で1945年7月7日付で、日朝の保護者宛に配布したものである。
36. 15に同じ、2011年（月日不詳）に電話、FAX等の確認等
35の小野に同じ、2011年1月12日聞き書き、電話での確認等
37. 小野幸子より筆者への2012年の年賀状、電話での確認
38. 高崎宗司の指摘「写真が語る戦争 植民地下の朝鮮 奪われた、何もかも」『朝日新聞』2007年10月7日
39. 2に同じ 170頁

40. 池田正枝・川瀬俊治「二つのウリナラ わが祖国」解放出版社 1999年 159頁
41. 2に同じ 179～181頁
42. 20に同じ
43. 森崎和江『二つのことば二つのころ』筑摩書房 1995年 205頁
44. 30に同じ
45. 9に同じ

(受理 平成24年1月10日)